

1 自己評価のまとめ

(1) 全体の傾向

平成15年度			設問別平均			領域別 全体
			高校	中学	全体	
1 教育的 人間力	1	授業をする楽しさを感じながら英語を教えることができ始めている。	3.19	2.95	3.07	2.98
	2	生徒理解が深まり、生徒との関係も今までと異なる新しい見方ができ始めている。	3.10	3.03	3.06	
	3	授業の目標や手段や評価について深く考察する姿勢ができ始めている。	3.12	3.00	3.06	
	4	職場の同僚と英語教育の問題点について気軽に話をする事ができる。	2.90	2.92	2.91	
	5	地域や生徒の願いを踏まえて、授業改善に前向きに取り組むことができ始めている。	2.76	2.82	2.79	
2 英語 運用 能力	1	研修実施前より一般的な英語運用能力が向上している。	2.31	2.26	2.28	2.67
	2	自ら設定した英語力目標に対する具体的な取り組み方を理解し、継続することができている。	2.57	2.44	2.51	
	3	授業中、最適なインプットを与えたり、生徒とインターアクションする割合が増えている。	2.71	2.72	2.72	
	4	可能な限り授業で英語を使おうとする前向きな意識が形成されている。	2.69	3.03	2.85	
	5	生涯にわたって英語運用能力の向上を図る意志ができている。	3.02	3.00	3.01	
3 英語 教授 力	1	アクションリサーチによる授業改善の方法を理解し、多少なりとも実践できている。	2.98	2.90	2.94	2.77
	2	課題としてあげた生徒の英語力に改善の兆しが見られる。	2.76	2.77	2.77	
	3	課題としてあげた生徒の授業態度に改善の兆しが見られる。	2.86	2.95	2.90	
	4	リサーチをした領域についての専門的な知識が増えている。	2.38	2.44	2.41	
	5	授業後、振り返り反省する習慣ができ、生徒による授業評価も改善の兆しが見られる。	2.83	2.85	2.84	
平均			2.81	2.80	2.81	

自己評価が高い項目（4点満点中で平均が3ポイントを越えている）

- ・ 授業をする楽しさを感じながら英語を教えることができ始めている。(3.07)
- ・ 生徒理解が深まり、生徒との関係も今までと異なる新しい見方ができ始めている。(3.06)
- ・ 授業の目標や手段や評価について深く考察する姿勢ができ始めている。(3.06)
- ・ 生涯にわたって英語運用能力の向上を図る意志ができている。(3.01)

自己評価が低い項目（4点満点中で平均が2.5ポイントを下回っているもの）

- ・ 研修実施前より一般的な英語運用能力が向上している。(2.28)
- ・ 自ら設定した英語力目標に対する具体的な取り組み方を理解し、継続することができている。(2.51)
- ・ リサーチをした領域についての専門的な知識が増えている。(2.41)

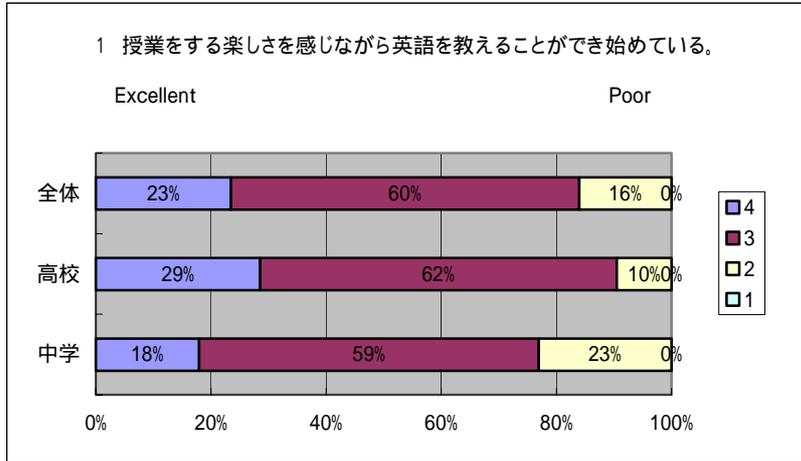
英語を教えることを喜びとし、生徒の良好な人間関係を気づきながら、授業に対する深い洞察をもととする「教育的人間力」を高めることができた。

「英語運用能力」の向上については、十分な向上が見られたとは考えていないが、生涯に渡って英語力の向上に努めるという意志の形成はできたようである。

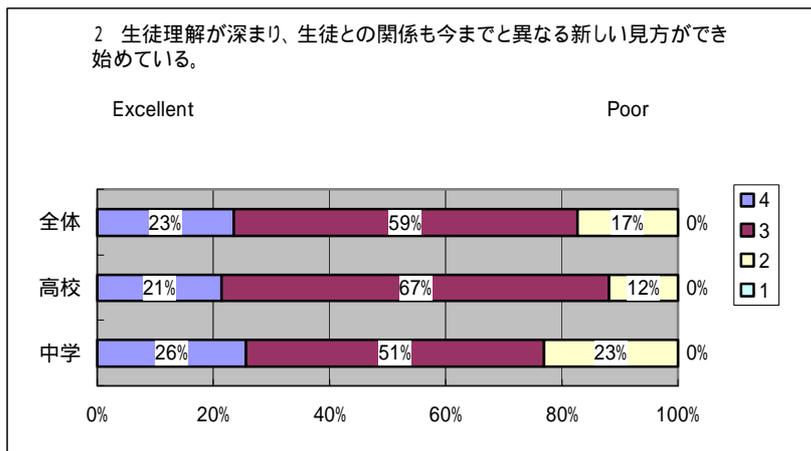
「英語教授力」では、アクションリサーチを実施するなかで、教科教育の専門的な知識の向上については十分でなかったと感じているようである。

(2) 設問毎の分析

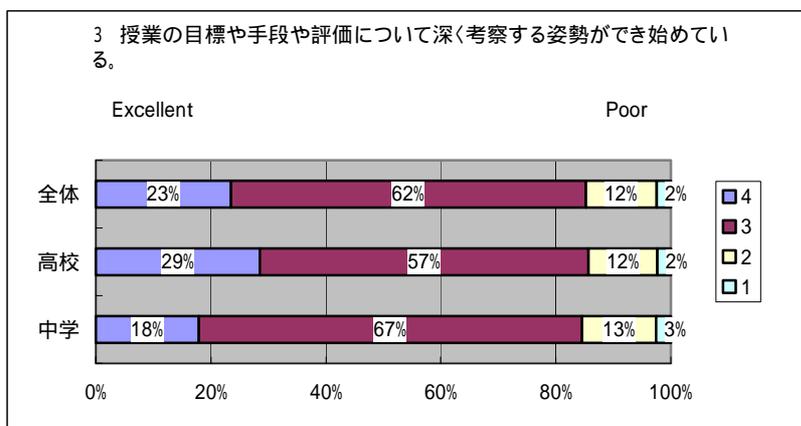
教育的人間力



概ね良好な結果である。高校の教員の方が、中学校の教員に比べて、授業をするたのしさをを感じながら授業をできるようになっている率が高い。

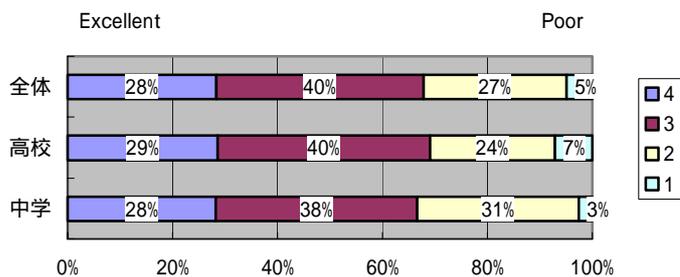


概ね良好な結果である。この項目も高校の教員の方が少し高い。



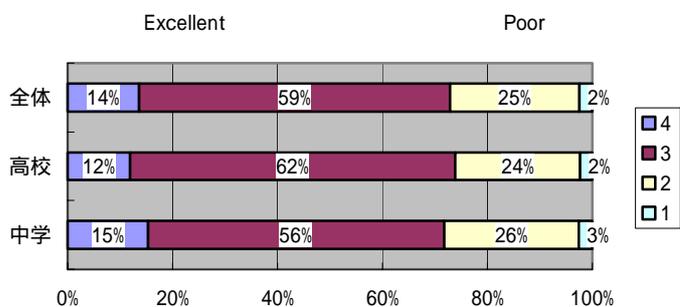
概ね良好な結果である。この項目では、「4」と「3」を合わせた率は、中高とも80%を超えているが、「4」Excellentと感じた率は高校の教員の方が高い。

4 職場の同僚と英語教育の問題点について気軽に話をするができる。



概ね良好な結果であるが、他の設問に比べるとやや低いようである。高校で「1」Poorと回答したものの率がやや高い。

5 授業後、振り返り反省する習慣ができ、生徒による授業評価も改善の兆しが見られる。



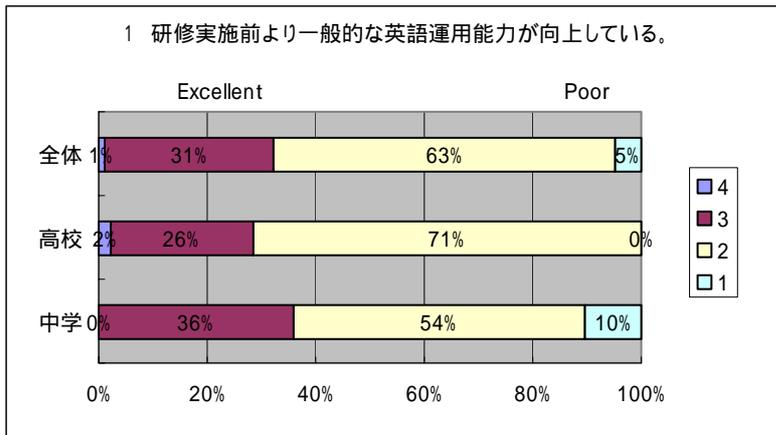
概ね良好な結果である。

全ての項目において良好な結果となっている。

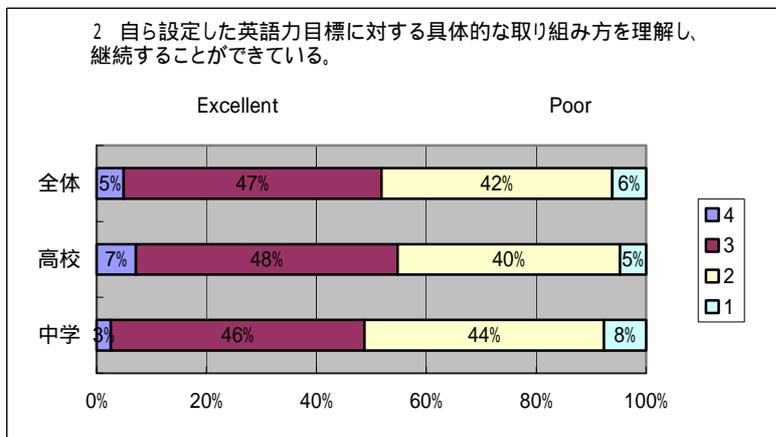
とりわけ、英語を教える喜び、生徒理解の促進、授業に対する深い考察という3点で成果があった。職場内での日常的な対話と授業を振り返ることの習慣化という点では、やや評価は低いものの、変化は実感されている。

校種別の差で見ると、英語を教える喜び、生徒理解、授業についての深い考察という点では、やや高校が上回っている。職場での日常的な対話という点では、あまり大きな差はないが、高校でほとんどないとする率がやや高い。

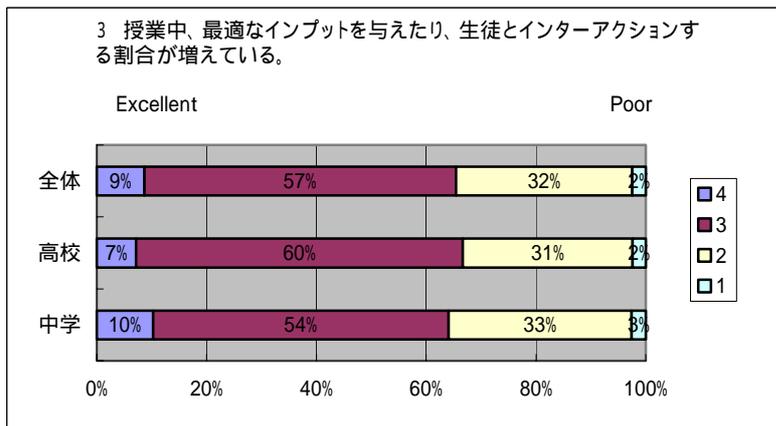
英語運用能力



「2」Fair と回答したものが最も多く、今回の研修だけで英語力が向上したとの実感は得られていないようである。

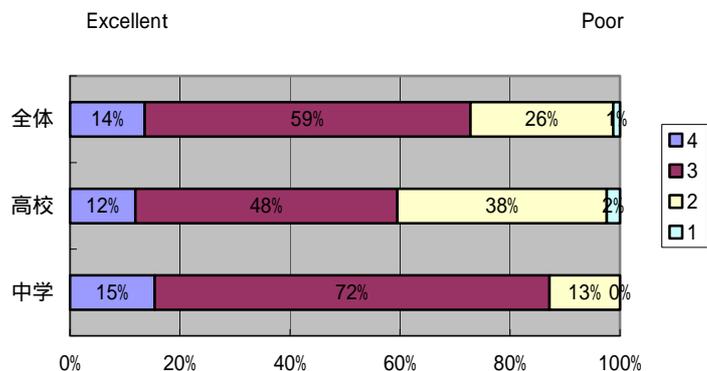


英語力向上に向けて継続的な取組も十分であるとは考えていない。中学校の教員がやや上回っている。



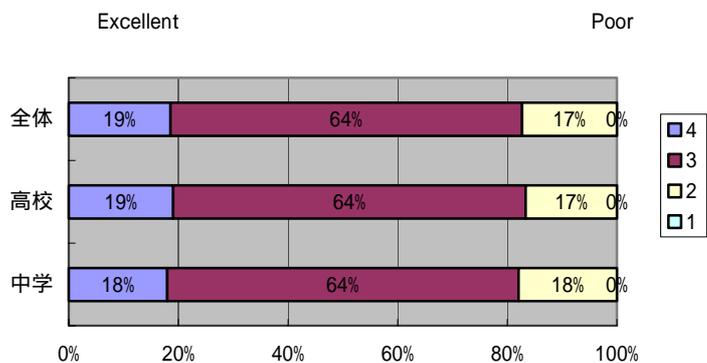
生徒に対して英語を使うということについては、全体としてはほぼ同じ傾向を示すが、「4」Excellent と回答した率は中学校が高い。

4 可能な限り授業で英語を使おうとする前向きな意識が形成されている。



授業で英語を使おうとする意識には大きな開きが見られ、中学校の方が圧倒的に高い。

5 生涯にわたって英語運用能力の向上を図る意志ができています。

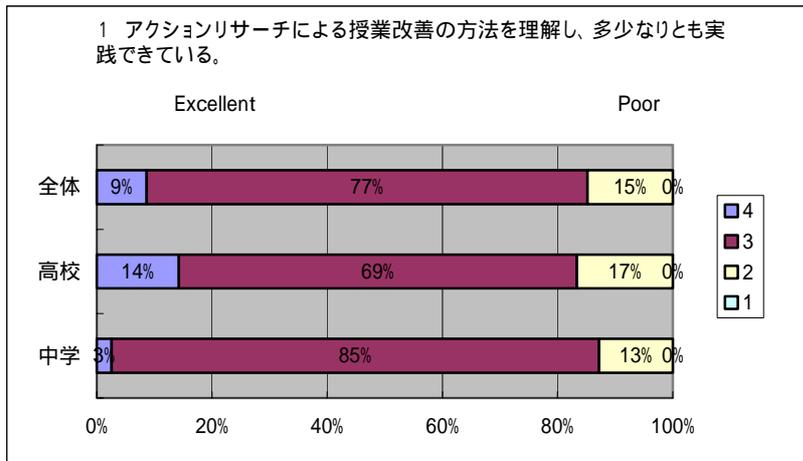


ほぼ同様の傾向をしめしており、全体的に評価が高い。今後の英語力の向上については、動機付けに成功したと考えると良いのではないか。

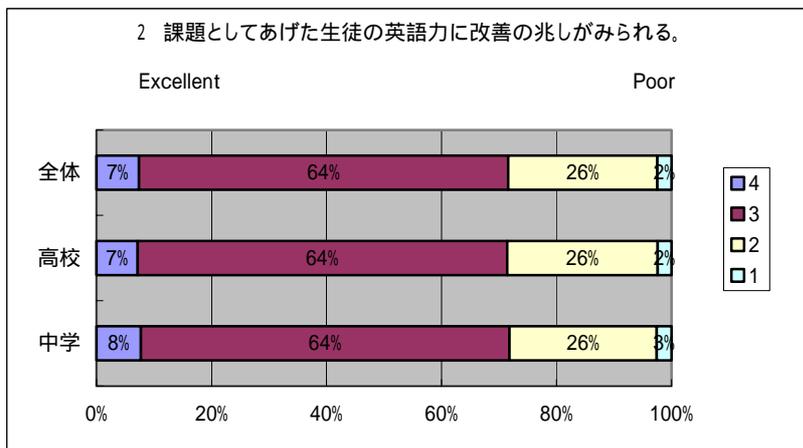
この研修期間内だけでは、十分に英語運用能力が向上したと実感できていないようである。しかし、これは当たり前のことであり、むしろ、今後生涯に渡って英語力の向上に努めたいとする意欲を高められたことは、大きな成果であった。

授業での英語使用については、中学校の教員に高い意識が見られるが、高校の教員が十分ではない。今後の課題である。

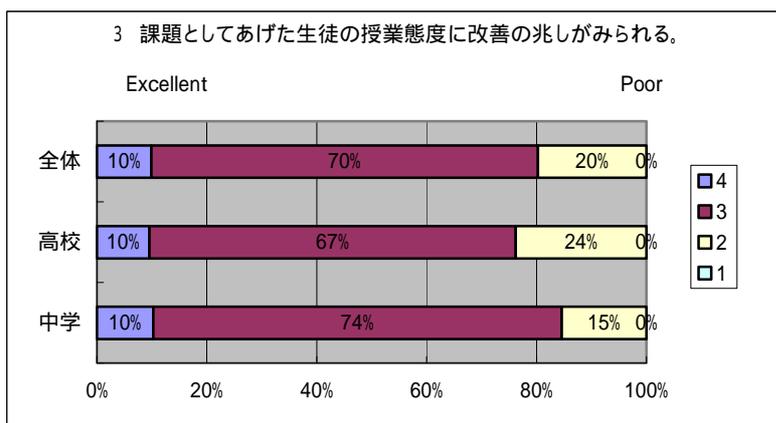
英語授業力



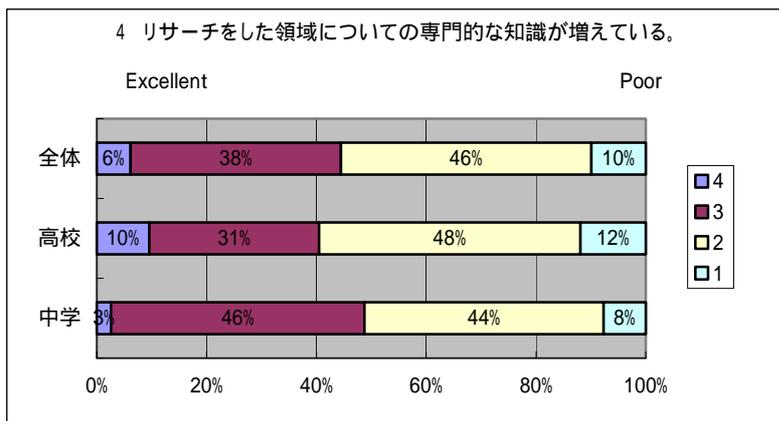
全体的に高い自己評価となっており、アクションリサーチの方法の定着とそれによる実践ができたことを示している。全体としては、中学校がやや高いが、「4」Excellentと回答した率は高校が高い。



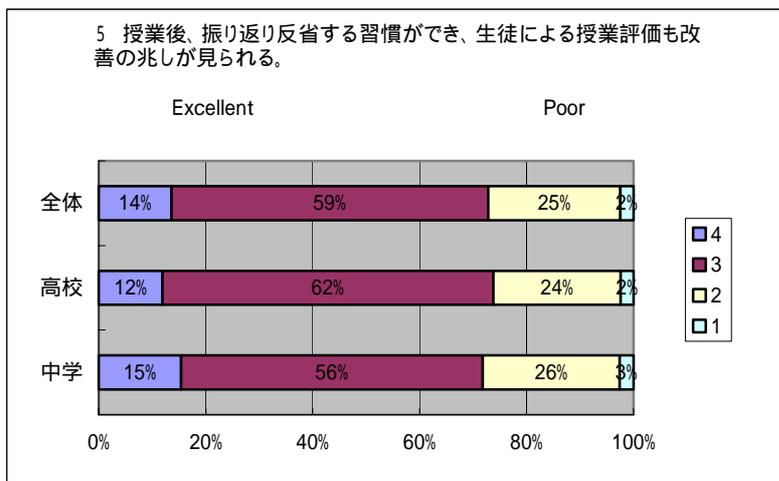
概ね良好だが、授業改善プロジェクトをとおして、生徒の英語力の改善を認めることができるまでには至っていないようである。今後の取組が重要ということであろう。



授業態度に改善が見られるという点も概ね良好な結果である。中学校の方が、授業態度の変化を実感している率が高い。



今回の設問の中でも最も評価が低い項目であった。リサーチにおいては、文献研究の充実が課題であろうし、通常の教育実践のためにも、補強が必要な分野である。



全体的に概ね良好である。

アクションリサーチに対する理解ができ、実際に実践を積み重ねて、徐々に英語力や授業態度の変容が見え初めているようである。正に、この部分が授業改善プロジェクトの最大のねらいであり、この項目で一定の自己評価がみられたことは、本年度の成果であったと認めて良いだろう。

一方、課題は明瞭で、アクションリサーチを進めるうえだけでなく、日常の授業実践においても、英語教育の専門的な知識が不足しているという点である。今後の対応が必要。

全体として、良好な自己評価がみられ、多くの先生方が、reflective practitioner、self-directed teacher としての第一歩を踏み出していただけただけなのではないかと考えている。

2 リサーチプロジェクトのまとめ（報告会での最後の協議の記録）

*下線を付したものについては、対応要か対応済

（1）アクション・リサーチの成果と課題（自己評価をもとに）

授業改善・アクションリサーチの効果

- ・思った以上に生徒からの協力が得られて活動が活発になった。
- ・様々な活動で目的をもって取り組み、振り返ることができるようになった。
- ・「点」で存在していた授業が「線」になってきた。
- ・授業を見直す良い機会となった。
- ・問題点に向けて具体的な取り組みができた。
- ・ねらいをもって授業を構成したり、活動を仕組むことができるようになった。
- ・継続が大切。
- ・手順がはっきりしているの、課題を見つけて進められるようになった。
- ・アクションリサーチの視点を取り入れることによって授業評価システムが中味のあるものになると思われる。
- ・生徒をじっくり見るようになった。
- ・アクションリサーチで、目に見えて現状が良くなるわけではないことがわかったが、小さなことでも自分の授業に改善がみられて良かった。
- ・「計画 実践 反省 改善した計画」というサイクルで授業をするようになった。

教員の指導力の向上・自己成長

- ・自分なりの課題をもって取り組むことができた。
- ・自分自身の指導を見直すことができたし、生徒の変容のすばらしさを感じました。
- ・自分のやっていることを自問自答して、改善していこうとする姿勢が身についた。
- ・目標に向かって一つ一つステップアップしていくことが大切なことに気づいた。
- ・生徒の学力不足は自分の指導力不足ということに気づいた。
- ・文献研究をすることができた。
- ・積極的にデータを見るようになった。そして、このデータをもとに次に進めようとした。リサーチを失敗したくないので成功しようと取り組んだ。
- ・日頃の出し合い話が大切だと思った。

意識改革、意欲の向上

- ・授業をすることが楽しみになった。
- ・授業に対する意識が変わった。
- ・データで結果が表れたことがよかった。
- ・子どもひとり一人を大切に作る姿勢が身についた。
- ・研修に参加しているいろいろな人のアイデアを聞くことは刺激になった。
- ・悩みを相談しあったりする時間は、自分自身に活力を与えてもらったし、有意義なものとなった。
- ・工夫改善をしたら、生徒側だけでなく、教師側にも返ってくるものがあった。
- ・生徒との中が深まった。

生徒の英語力の向上

- ・生徒が文章で読む書くということができるようになった。
- ・生徒がこなせる課題を与えることが大切だとわかった。各段階で生徒の力を見極めることが大切。

課題

- ・アクションリサーチと生徒指導は別物である。(?)
- ・検証の作業に苦勞した。もっと、日頃からやっていく癖をつける。
- ・リサーチクエスションの設定が難しかった。広がりすぎて、検証が不十分になった。
【オリエンテーション、初期の支援の充実】
- ・仮説、実験、結果 「それからどうする？」ができなかった。アドバイスがほしかった。
【指導主事によるメンタリングの導入】

(2) 今後のFD(Faculty Development)にどう取り組んでいくか。

授業観の見直し

- ・テキストばかりに気をとられずに、目の前の生徒に向き合っていきたい。

意欲

- ・本気で、勉強に取り組んでいきたい。
- ・自分自身も学習者である。生徒とともに。
- ・継続を大切にしたい。
- ・各種資格試験を積極的に受ける。
- ・現状に満足せず、問題点を探ること、気づくこと。

アクション・リサーチ

- ・授業改善とフィードバック、分析、対策と筋道だてて行う。
- ・小さなアクションリサーチの取組を継続していく。
- ・簡単な形式のフィールドノートをもとに、スキルの向上を図りたい。

研修の必要性

- ・教員同士が切磋琢磨できる場が必須でしょう。
- ・すぐれた実践家に学びたい。

教職の専門性

- ・教材研究を充実させたい。
- ・文献を読んだり、研修を積んだりしながら、自分の力を磨いていきたい。

英語力

- ・教える力とともに教師側の英語を学ぶ力を身に付けたい。
- ・英語力アップのために、通勤時間を活用するなど時間を生み出す工夫をしたい。
- ・英語力不足を痛感した。今後更に研修を積んでいきたいし、そのような機会を提供してほしい。
- ・英語力を高める必要がある。

広がり

- ・英語教員だけではいけないので、他の先生方と協力していく。
- ・仲間作りに全教職員で取り組んでいくこと。
- ・同僚との協力関係を気づくこと。

(3) 授業改善プロジェクトの改善に向けて

日程

- ・年間のプロジェクトの流れを明確に示して欲しかった。 【オリエンテーションで実施】
- ・最終日の日程をもう少し遅らせてほしい。
- ・期間が短かった。もう少し早く提案してほしい。

メーリングリスト

- ・メーリングリストが上手く活用できなかった。(メールでの意見交換は無理かも) 【指導主事によるメンタリングの導入】
- ・タイムリーな助言をいただくためのメーリングリストとだいたいのようですが、なかなか。
- ・中高の教員を同じメーリングリストにする。 【メーリングリストの変更】

実践例やモデル

- ・具体的な事業実践のモデルを見せていただきたかった。
- ・夏休み段階にアクションリサーチの実践発表をみられたらもっと参考になった。 【夏期集中研修の見直し】

研修実施方法

- ・学校ぐるみで取り組むことが望ましい。
- ・学校単位でリサーチクエストを定めれば、もっと相談できて良いのでは。 【リサーチグループの編成で工夫】
- ・研修参加希望者には聴講という形で参加を認めてほしい。 【検討要：認めたい】
- ・もう少し専門的な力を身につけたかった。
- ・A L Tが講師の研修は工夫が必要。 【プログラムの見直し】
- ・グループ内で月に2回程度の連絡会がほしかった。
- ・指導主事の先生方の指導助言、アドバイスがほしかった。 【指導主事によるメンタリングの導入】
- ・アクションリサーチ自体は良かった。
- ・メールでの事務連絡は徹底しない。
- ・開始時期を早めることで、アクション・リサーチに取り組やすくなる。
- ・事前にアクション・リサーチの本を読んで、心の準備をしておくが良い。

3 今後の課題

アクション・リサーチを使った授業改善プロジェクトについて、参加者は一定の評価をしており、目標はほぼ達成されたと考えられる。基本的に、現在の方法の改善を図りながら継続していく。

(1) 英語を教えることを喜びとし、生徒の良好な人間関係を気づきながら、授業に対する深い洞察をもととする「教育的人間力」を高めることに効果があった。この点については、引き続き参加者の自主的取組や意欲を大切にしながら、互いに高めあえる研修の雰囲気作りに努めていきたい。

(2) 英語運用能力の向上については、研修期間内では十分な向上が見られなかったが、生涯に渡って英語力の向上に努めるという意欲を高めることができていた。これは、当初のねらいどおりであり、今後も継続する。

(3) 「英語教授力」では、教科教育の専門的な知識の向上ということが課題であった。集合研修の講演等の充実を図るとともに、アクション・リサーチを使った、実践的な職場内研修の中で高めていけるよう工夫をしたい。

(4) 具体的課題：

アクション・リサーチへの専門的な支援の充実

メーリングリストの見直し

オリエンテーションの充実

リサーチ初期段階の支援の充実

夏期集合研修プログラムの見直し（実技研修の改善、実践発表の導入）

教科教育の専門的知識の向上

授業での英語使用についての働きかけ

自己変容、自己の能力開発の喜びを実感できる雰囲気作り

(5) 平成16年度の改善の重点項目：

指導主事によるメンタリングの導入（指導主事のためのワークショップ含む）

メーリングリストは、全受講者を一つのリストに登録することとし、情報交換、意見交換の場として活用する。

参加者からの要望をもとに、研修プログラム、日程、運営方法等の改善を図る。基本的には、時間にゆとりをもたせ、じっくりと一つのテーマに取り組めるようにする。

授業改善プロジェクトの達成目標

[目指す英語教師像]

良質の英語を使った授業を展開することができ(REAL English Teacher)、省察によって授業を改善する方法を身につけ(reflective practitioner)、新しい英語教育の創造に自ら積極的にコミットする英語教員(self-directed teacher)

[授業改善プロジェクトの達成目標と評価の観点]

1 教育的人間力

(教職に対する情熱、使命感、生徒に対する教育愛)

- 1) 授業をする楽しさを感じながら英語を教えることができ始めている。
- 2) 生徒理解が深まり、生徒との関係も今までと異なる新しい見方ができ始めている。
- 3) 授業の目標や手段や評価について深く考察する姿勢ができ始めている。
- 4) 職場の同僚と英語教育の問題点について気軽に話をするができる。
- 5) 地域や生徒の願いを踏まえて、授業改善に前向きに取り組むことができ始めている。

2 英語運用能力

(英語運用能力の向上とそれを生かした授業の実施)

- 1) 研修実施前より一般的な英語運用能力が向上している。
- 2) 自ら設定した英語力目標に対する具体的な取り組み方を理解し、継続することができている。
- 3) 授業中、最適なインプットを与えたり、生徒とインターアクションする割合が増えている。
- 4) 可能な限り授業で英語を使おうとする前向きな意識が形成されている。
- 5) 生涯にわたって英語運用能力の向上を図る意志ができている。

3 英語教授力

(教科指導に関する専門的知識と技能の向上)

- 1) アクション・リサーチによる授業改善の方法を理解し、多少なりとも実践できている。
- 2) 課題としてあげた生徒の英語力に改善の兆しが見られる。
- 3) 課題としてあげた生徒の授業態度に改善の兆しが見られる。
- 4) リサーチをした領域についての専門的な知識が増えている。
- 5) 授業後、振り返り反省する習慣ができ、生徒による授業評価も改善の兆しが見られる。